▼作品情報
作品タイトル：風舞う街
▼作者情報
作者：蕗野透

＝＝

はじまりの空

＋＋

少年が膝を組んで空を見上げていた。
空には丸く白い風船のようなものが並んでいる。
間から薄く光が差していた。
手長蝦《てながえび》が頬をかすめて泳いでいく。
空から、首飾りがゆっくりと落ちてきた。
ガラスの珠《たま》が連なり、黒い革紐で作った首飾りだ。
その首飾りが少年の手のひらにゆっくりと乗った。
じっとそれを見る。
青や紺や緑の小さなガラス玉が空からの光を蓄え、そして放つ。
少年はしばらく見入っていた。
首飾りが落ちてきた空を見上げると、光の差す隙間から、色の白い少女の顔が見えた。
ぼんやりとした表情の少年の瞳が、途端に大きく見開かれた。
あの子の顔だ。あの子の目だ。
忘れるわけもない。
少年は大きく伸びをすると、空へ向かって泳ぎ始めた。

＝＝
水の無い川
＋＋

町田舞は、母である貴子の運転する小さな車の後席に乗り、引っ越し先の大田原市薄葉へ向かっていた。
二人が長く暮らした世田谷の古びたマンションが、老朽化でついに取り壊されることになり、貴子は父母、つまり舞の祖父母の暮らす栃木県の那須野が原に条件の良い仕事と住家を見つけ、娘の舞とふたりで引っ越すことにしたのだ。
舞は成績こそ良かったが、どこかのんびりしたところがあり、忙《せわ》しない都会よりも那須野が原の自然の中で育てたほうが良いという思いもあった。

「ねえ、舞。地図のとおりに走ると確かこの道だと思うんだけど、風景が少し違うと思わない？」
「もう、お母さんが高速道路のインターひとつ乗り越しちゃったから、予定とぜんぜん違う道になってるよ。だんだん人家が少なくなってきて、荒地みたいになってる」
「あ、ここ蛇尾川《さびかわ》の洗い越しだわ。ほんとに道間違っちゃったみたいね」
貴子にとっては実家のある那須野が原だが、自分の運転で帰省するのは初めてで、西那須野で降りるはずが黒磯までインターチェンジをひとつ乗り越してしまったのだ。
「お母さんは川っていうけど、石しかないよ、ここ」
「これはね、蛇尾川の洗い越しって言って、水はこの地面の下を流れているの」
舗装さえされておらず、車一台がやっと通れるほどの道路を車が走る。道の両脇は舞が言う通り石の荒野のようだ。
後席からナビの画面を見た後、後席の窓ガラスを下ろして、舞は窓の外に顔を出した。両手で抑えた白い帽子の下から伸びた長い黒い髪が風に弄《もてあそ》ばれる。
那須野が原は広大な扇状地である。堆積した砂礫が層をなしており、どこを掘っても数十センチで砂礫層が出る。このため、降った雨は地面に吸収され砂礫層の下を流れてしまうので、通常は川に水が無いのだ。
車はゆっくりと走っていたが、びゅうと風が勢いを増して少女の白い帽子を青い空に持ち去った。
「あ！！」
「どうしたの舞？」
「お母さん、車を停めて！帽子が飛んじゃった」
「えー？何やってるのよ」
「ごめんなさい！ちゃんと手で押さえてたんだけど、急に強い風が当たって。ちょっと取ってくる！」

貴子は車を停めた。舞は後席から飛び出すように走り出す。貴子も舞の後を追った。
飛ばされた帽子は水の無い川の、敷き詰められたような石の荒野の、とりわけ大きな石の上に乗っていた。舞はぴょんぴょんと石の上を飛んで帽子が落ちた場所まで行き、ゆっくりとしゃがんでそれを拾うと、後から両手を広げてバランスをとりながら追いかけてきた母のもとに走った。
そして不思議そうに訊いた。
「ねえ、お母さん。ここは本当に川なの？」
「そうよ、川なんだけどね。水が無いでしょう？」
「うん。石ばっかり。でもちょっとだけ川の匂いがする」
二人は手をつないで石の荒野を歩き、車までたどり着いた。
舞は誰かに呼ばれたような気がして、帽子の端を押さえながら振り向いたが誰もいなかった。
ドアが閉まる音がして、道を車が走って行く。

いつの間にか、敷き詰められたように広がる石の上に少年が立ち、舞と貴子の乗る車を見ていた。
黒くぼさぼさに伸びた長い髪、薄汚れた白いシャツに半ズボン。身なりは薄汚い印象をうけるが、顔は驚くほど白く、切れ長の大きな瞳が伸びた髪の下で光っていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

出逢い

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ねえ、お母さん、私たち本当にここに住むの？」
舞は白いマスクをしたまま、片手に黒く汚れた雑巾の端っこをつまんで立っている。
築四十年はゆうに超える家の中、畳にはうっすら埃が積もっていた。
キッチンの床はフローリングではなく「板張」で、貴子が拭いた雑巾の面積だけ、スリガラスを通した外の光を反射した。
引っ越しセンターが運び込み、積まれた白い段ボールだけが明るい色を放っている。
「この家はね、お母さんが昔お世話になった方から特別に貸してもらったの。とても立派なお家でしょう？」
床を拭く手を止めて諭すように貴子が言った。
「立派だけど、私はもうちょっと新しい家がよかったなぁ」
「文句言わない」
不貞腐《ふてくさ》れる舞の言葉を貴子が一蹴《いっしゅう》する。

舞は渋々作業を再開した。
二人が雑巾を数回洗っただけで、バケツの中の水は墨汁を垂らしたように黒くなった。
キッチンには大きなテーブルがあり、立派な椅子もあった。
家具店に買いに行けばそれなりの値段はするであろう、凝った飾り彫りが施してある椅子と、分厚い一枚板のテーブルはどちらも年代物で燻されたように黒かった。
「あたしこのテーブルと椅子、なんかヤダ」
其々がなかなかに高価なものであることが伺えるが、舞にはそのような価値は理解できず、ただ古いという事しかわからない。
貴子は舞の尖った口から出るボヤキを他所に、スリッパを脱ぐと椅子に乗って天井から下がる四角い和風の蛍光灯の囲いを拭いた。
「あれ？紐が無い。舞、壁のスイッチ押して。蛍光灯のスイッチ」
「どこ？」
「食器棚の横よ」
「あ、あった！」
舞が壁に見つけた象牙色《ぞうげいろ》のスイッチを押すと蛍光灯が点き、思いがけず部屋の中が明るくなった。しらずしらずのうちに暗くなっていた部屋の中にポッと音がしたように明かりが灯る。
舞も自分の気持ちが明るくなったような気がした。
「さて、拭き掃除はこのくらいにして、段ボールの中のものを二階の舞の部屋に運んだら、ご飯食べよっか」
「うん賛成。お腹減ったよう。でもまだお皿とかお鍋とか出してないよ」
「さっき、ここに着く前にコンビニでお弁当買ったでしょう？」
「そうだった！」
舞はテーブルの端に乗せたままになっていたお弁当を横目で確認した。
「あれ？舞、あなたお気に入りの首飾りはもう外したの？今日出発するときにはつけていたよね？」
母の言葉の意味を飲み込むのに数秒かかったあと、舞は素っ頓狂な声を上げた。
「あ！無い！！首飾りがない！」
お気に入りの首飾りとは、舞がまだ小さい頃、父と一緒に行ったデパートで買ってもらった舞の宝物なのだ。
ドタドタと自分に割り当てられた二階の部屋へ階段を上った後、また直ぐに階段を駆け下りてきて、ひとしきり家の中を探し回った舞は半ベソをかいていた。
はっと思いついて、母から車の鍵を貸りドアを開けて車の中を探し回ったが、やはり首飾りを見つけることができなかった。
（きっと、川に帽子を拾いに行ったときに落としたんだ）
今から取りに行きたいが、辺りは薄暗くなっていた。

「お母さん――」
舞は掃除を続ける貴子の服をつまんで引っ張る。引っ張り方と舞の表情から我が娘の言いたいことが痛いほどわかる貴子だったが、
「大切な首飾りだということはわかるけど、だめよ。もう暗くなるから探しに行ったら危ないし。今日は諦めて明日の朝早くに行きましょう」
と窘《たしな》めた。
「だって――――」
舞は半べその顔がさらに崩壊しそうになり、大きな目に涙をいっぱいに溜めて鼻を鳴らした。
母の言うことはまさに正論だ。
しかし、ただ正論では舞の心のさざ波を収めることは出来なかった。
舞は板張りの廊下を駆けた勢いで裸足のままタイル張りの土間に降り、靴に足を入れるなり玄関の戸を開けた。
歩いてでも探しに行こうと心の中に芽生えていた決意はしかし、薄暗い外の風景を見るなり萎《しお》れてしまった。
緋色《ひいろ》の空を、黒く切り取った影絵のように飛ぶカラスが目に入り、カーカーと鳴く声が聞こえると更に足がすくみ、怖くて玄関から道路に出ることさえ出来なかった。
それでも勇気を振り絞り靴を履き、やっとのことで玄関横の駐車場にある母の車の横まで歩を進めたが、ついにしゃがみ込んでしまった。
舞の黒目がちの大きな瞳から、溜めていた涙がぽろぽろと頬を転げ落ちた。

凪いでいたはずの夕暮れどきの路地の上を、突然風が通り過ぎた。
玄関わきにある立派なカイズカイブキの枝がざっと音をたてる。

「おい」
ふと、ブロック塀の角から声がして舞は顔を上げた。
薄暗い中にぼさぼさ髪の少年が立っていた。
舞よりずいぶん背が高い。
道の向こうのブロック塀際に立った黄色い街頭の逆光で、人の形のシルエットができている。
「これ、おまえのだろう」
ゆっくりと歩み寄ってきた少年の差しだした手に握られていたのは、失くしたはずの首飾りだった。
最初身を竦めた舞であったが、恐る恐る手を伸ばした。
「これ、おまえのだろう？」
言葉を繰り返した少年が、舞の手の上に首飾りを置いた。

「ど、どうしてこれを」
「おまえが川で落としたのを見た。だから拾って追いかけて来た」
「やっぱり川に落としていたんだ。でも、あの川からここまで、結構遠いはずだよ」
「うん。だから時間がかかった」
淡々と少年は答える
「ありがとう、ありがとう。もう見つからないって思ってた」
手渡された首飾りを受け取り喜ぶ舞を、少年は眩しそうに見ていた。
「ちょっと待ってね、お母さんを呼んでくる」
舞は家の中に駆け込むと、少年が首飾りを持ってきてくれたことを告げ、母の手を引いて玄関まで出てきた。
しかし、そこには少年の姿はなかった。
「あれえ、帰っちゃったのかなあ」
舞は玄関から道路まで走り出て、最初に声のしたブロック塀から左右の道を見たが誰もいなかった。
「照れ屋な男の子だったのね。この近所の子かもしれないから、見かけたら教えてね。今日のお礼しなくちゃ」
貴子と舞は玄関の戸をガラガラと閉め、家の中へと入った。
少しずつ寒さを増す十月末の夕暮れ。
透明で冷たい空気に満たされた西の空に、割れた硝子《ガラス》のような三日月が輝いていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

西郷神社にて

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

年が明け、厳しい冬が過ぎ、春がやってきた。那須野が原に引っ越してきて半年ほど経ち、学年が変わっても、舞は新しい中学校になかなか馴染めなかった。
友達たちに仲間外れにされたり虐められるわけでもなかったのだが、言葉や興味の対象が微妙に違う。
その違いを皆に合わせて話もできるのだが、一日が終わると少し疲れてしまうのだ。

そんな舞のほっと出来るお気に入りの場所は西郷神社だった。
自宅の近くでもあり、石造りの社殿がエキゾチックでもある。
道路沿いにＤＩＹショップや大型書店があったりするが、周囲には田畑が散見され、木々がお社を囲んでいて小さな林のようだった。何より舞の父方の祖父は鹿児島出身であり、明治維新の英雄西郷隆盛の弟、西郷従道を奉る西郷神社に心の拠り所というか、懐かしさを感じたのだ。

ある土曜日の午後。
舞は西郷神社にいた。
まばらに立つ木々の間を、早春の柔らかな風がゆっくりと吹き抜けていた。
風は若草と木の香りを孕み、舞の切り揃えられた前髪を揺らす。
中学３年の４月、高校受験を控えている学年になり、心の端に薄いベールの様にかかる焦燥感を、神社の佇まいが癒してくれた。
大きな杉の木によりかかり、読みかけているＳＦショートショートの本を開くと、舞の意識はすっと本の世界へと入り込んでいった。

「おい」
聞き覚えのある声に、舞は本の中の世界から引き戻され我に返った。
すぐ前に、ぼさぼさの長い髪に汚れたシャツ。半ズボンにサンダル履きの少年が立っている。
「あなたは――」
「ひさしぶりだな」
ぶっきらぼうな物言いだが、少しはにかんだ顔が少年の性格を物語っている。
首飾りを持ってきてくれた時は逆光でよくわからなかったが、伸び放題の髪の下の顔は薄く汚れてはいても、ぶっきらぼうな言葉に反して思いがけず整っていた。
「ずっと探していたのよ。ちゃんとお礼しようと思って、お菓子も準備していたのに、渡

すことも出来なかったんだもん」
「お菓子、あるのか？」
「だから、あなたが見つからなかったから食べちゃった。もう半年も前の話よ」
「おれの分のお菓子、おまえが食べちゃったのか？」
「うん」
悪びれず頷く舞の顔を見て少年は笑った。

「こんなところで何してるんだ？」
「本を読んでたの。ここ、好きなんだよね。なんとなく落ち着くの」
「おれもここは好きだ」
少年はふうと息を吐くと境内に伸びる木々の葉を見上げた。
彼の雰囲気は西郷神社の境内にきれいに溶け込んでいる。
「友達と一緒にいるより、ひとりでここにいるほうが落ち着くの」
「友達って、仲間の事か？」
「そうよ」
「お前、その友達ってやつと遊ばないのか？」
「私、転校生なのよ。あなたに首飾り拾ってもらったときに、那須野が原に引っ越して来たの。友達といるとなんだか疲れるのよね」
「テンコウセーって、余所者ってことか？」
「そう、余所者。だから友達といるより、ここで本を読んでいるほうが落ち着くの」
「友達って疲れるものなのか？仲間の事だろう？」
「こっちの友達とお話しするとき、合いそうな話を考えて、言葉を選んでお話しするからなんだか疲れるの。うまくいかないっていうか、うまくいっているのかもしれないけど、ギクシャクしちゃうっていうか」
「へえ、やっぱりお前、変わった人間だな」
「やっぱりってどういうこと？あなたこそここで何してるの？」
「今夜、ここで寄り合いがあるんだ」
「寄り合い？」
「年に何度かあるんだ。季節の変わり目にあるから一年に四回か」
指を折りながら少年はぼりぼりと頭を掻いた。小さな粉が辺りに散ったように見えた。
「あのな。ちょっとお前の顔見てたら気になって———ひとつ忠告しといてやる。川に手長蝦《てながえび》がいたとする。その手長蝦《てながえび》を取って食おうと思うと、手長蝦は逃げるんだ。でも何も考えないで、ぼーっとしてると手長蝦《てながえび》は寄ってくる」
舞は話の意味が分からず、ポカンと口を開けた。
「何それ、意味わかんない」

少年は舞の反応に構わず、身振り手振りで泳ぐ蝦を表現しながら、少し口を尖らせて言葉を続けた。
「その友達ってやつ、つかまえようとするから逃げるような気がする。お前が捕まえようとする気配が相手に伝わってしまう。だったらじっとしていて、近寄ってきたやつをつかまえて食えばいい」
少年は、パクっと、大きな魚が寄ってきた手長蝦を食べるように、大きな口で食べるそぶりを見せた。
「あはは。友達を食べたりしないわよ。でもありがとう。なんだか気が楽になった。そうよね、無理して相手に合わせるよりも、私は私でいればいいのかも」
「友達、うまく捕まえられたらいいな」
「うん。そうだね」
舞がお礼を言うと少年はニッと笑った。半年前に首飾りを持って来た時と同じ笑顔だった。
「ねえ、ところであなたの名前はなんていうの」
「おれの名前はサビマル」
「サビマル？変わった名前ね。そう、昔の人みたい――。侍か忍者みたいな。どんな字を書くの？」
「それはお前、サビっていえば」
「わかった！忍者みたいな名前だと思ったんだよね。猿飛佐助の佐と飛で左飛丸なのね」
「あ、いや、ええっと、うー、そうだ。お前のいう通りだ」
「佐飛丸ね。このあたりに住んでるの？」
「お、おお。ずっと昔からな」
舞は少し勇気を出して、
「じゃあ、あなたが――――」
友達になって、と言い出そうとした刹那、びゅうと強い風が吹き、立ち並ぶ木々の枝が泳いだ。
「ちっ。もう寄り合いが始まっちまった。じゃあな」
という声が聞こえ、舞が風の強さに瞑った目を開けたとき、佐飛丸という少年の姿は消えていた。

焦燥

「あれ？佐飛丸くん？ねえ、どこへ行ったの？」
舞は神社の中を歩いて探し回ったが、どこにも佐飛丸の姿はなかった。
「ほんとに忍者だったりして」
とひとり頷いて帰路についた。
引っ越してきた日に首飾りを拾ってくれた少年「佐飛丸」に会ったことを母に話そうと喜々として家路を急いだ舞であったが、帰宅すると貴子の車の後ろに大きなＲＶ車が停まっていた。
玄関に入ると、黒く大きな靴がきちんと揃えて外を向いていた。

そういえば、家を出るときに、
「お客さんが来るから早く帰ってきてね」
と母に言われていたことを思い出した。
佐飛丸に会ったことで、その事をすっかり忘れていたのだ。

客は、以前見たことがある男の人だった。
母の職場、病院付属の薬局の新年会で少し酔った母を家まで送ってくれたひとだ。
背が高く細身の真面目そうな、母よりだいぶ若い男の人。
しまうのが遅くなった炬燵に、母とその男の人が並んで座っていた。
「舞、おかえり。ちょっといいかな」
貴子が立ち上がり、舞に声をかけた。
テーブルの上には、きれいに切られた林檎がガラスの皿に盛られている。
白に青の模様の入ったコーヒーがその男性の前に置いてあるが、それは我が家で一番いいカップに注いである。しかも二つしかないカップだ。
（私とお母さんのカップなのに）
心の奥にちりちりとした何かが渦巻き、舞は無意識に自分の心の内を悟って欲しくなり貴子の顔を見たが、舞の思いは少し緊張した横顔の貴子には届かなかった。
舞は促されるまま、炬燵の二人の正面にあたる位置に座った。
（なんだろう、これ）
「あのね、舞。こちら同じ職場の小原さん」
（お母さんの声、ちょっとだけ高くなってる）
「こんにちは。舞です」
舞はゆっくり頭を下げた。笑おうとしたが、頬骨がしびれたようにぎこちない笑顔となっ

た。
「こ、こんにちは。小原と言います。僕はお母さんと一緒の職場で――」
男の人が丁寧に言葉を区切りながら、自己紹介を兼ねた挨拶をした。
（知ってる。お正月休み明けの新年会のときに、酔っぱらったお母さんを送ってきた人。お母さんのことをとても大事そうにしていた）
「ええと、その。舞さんにちゃんと挨拶したくて。舞さんが好きだと聞いて、樹林のバームクーヘンも買ってきました」
小原は白い箱を待ってましたとばかりにテーブルの上に置いた。
（私のお気に入りのお菓子。ということは、お母さんに聞いたんだ。この流れって、そういうことだよね）
「舞、お母さんね、小原さんに――」
舞は言葉を遮るように、母の顔から視線を逸らした。
逸らした視線の先に、少し開いた襖の向こうの薄く照らされた仏間が見えた。
仏壇こそなかったが、そこには花入れと小さな写真立てがあった。
父と母と自分が写った写真だ。薄暗く、フレームにオレンジ球の光が反射しているだけだったが、亡き父がこちらを見ているような気がした。
舞は、ここ数分の出来事で心の器がいっぱいになってしまった。
「ごめんなさい」
二人にそれだけ告げると、静かに立ちあがり自分の部屋へ向かった。
チラと、小原という男が、慌てたような残念なような顔をしたのが目に入った。
舞は着替えもせず、横になって布団をかぶった。
外界から自分を遮断したかった。
ごはんも、お風呂も今日はイヤ。
ぐるぐると渦巻く不安。
今まで自分が立っていた足場が崩れてしまい、そっくり無くなってしまうような不安を覚えた。
お母さんが、お父さんじゃない男の人と。
私だって思春期の女の子なのに、受験を控えた学年なのに――
声に出さないまでも心の中で叫んだ。
母親と自分の二人の家族は永遠に変わらない枠組みのように思っていた。
心の大きな起伏が落ち着いて、少しおなかが減ったなと感じ、起きて行ってこっそり何か食べようかなと思い始めた頃、すとんと眠りに落ちてしまった。

その夜、舞は夢を見た。
幼い頃の自分が見ている風景であろう、低い視点から世界が広がっていた。
父と河原で遊んでいると、少年たちが声を上げて騒いでいる様子が目に入った。

輪の中心にいるひとりの少年が手に何かを握っている。
それを河原の石に投げつけようとしていた。
しかし、何を握っているのか、その部分が黒く暈《ぼや》けて舞には見えなかった。
舞は少年たちに走り寄り、その何かを自分に渡すよう懇願《こんがん》した。
少年たちは取り合わなかったが、父が自分の後ろから、少年たちに何かを告げる。
少年が手に持っていたものを放り投げるように舞に渡した。
舞がそれを受け取った。
何か大切なもの。守らなければならないもの。
舞は掌の上のそれをじっと見つめていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

団欒

目が覚めるといつもと変わらぬ日曜の朝だった。

母の作る料理の良い香りが鼻をつく。

遊び着のまま眠ってしまった舞は、申し訳けなさそうにリビングに出てきた。

昨日自分のした行為について、いくら気持ちがいっぱいいっぱいになったとはいえ、折角の来客に失礼な事をしてしまったと反省した。そのことについて母から当然叱られると思っていた。

しかし。

「舞、起きた？ご飯食べられる？」

母の口調はいつもと変わらなかった。

「うん、あのね、昨日は――――」

と舞がいいかけたとき

「舞、昨日はごめんね。自分の都合で舞の気持ち考えてあげられなくて」

母がテーブルの向かいに座って言った。

「え？」

思いがけなく優しい言葉に舞はとまどった。

「あのね、私、昨日来た小原さんに交際を申し込まれたの」

「そ、そうなんだ」

(やっぱり、そうだよね。それしかないよね)

「でね、小原さんいい人だけど、お母さんどうしようか迷ったの」

貴子は娘の舞から言うのもなんだが、なかなかの美人である。しかも気立てが優しく仕事も出来ると以前の母の職場の同僚たちから何度も聞かされていた。言い寄る男は何人もいたが、一も二もなく断っていたそうだ。その貴子が迷っていると言う。

「お母さんも小原さんのこと好きなの？」

「ううーん、好きかと言われると困るわね。だけど、お父さんが天国に行ってから十年、ここまで一人で舞を育てて来て、お付き合いしてもいいなって思えた男のひとは初めてね」

「優しそうなひとだよね」

「うん、とてもいいひとよ。ちょっと真面目過ぎるけど。それでさ、正式にお付き合いする前に、舞に挨拶に来たいっていうのよ」

「ごめんね。せっかく来てくださったのに、あんな態度とっちゃって。でも、でもね、私の中にはまだお父さんがいるの――」

「わかってるわ。小原さんには私から言っておくから。さあ、ご飯食べましょう」

「あ！」

舞は大きな声を上げた。
「どうしたの」
「すっかり忘れてた。昨日ね、ここに引っ越して来た時に首飾り拾ってくれた男の子に会ったの。名前は佐飛丸っていうんだって。西郷神社のそばに住んでるって言ってたわ」
「サビマル？変わった名前ね。苗字はなんていうのかしら」
「――――あ！聞くの忘れた」
「もー。」
母と娘は笑った。いつもと変わらぬ団欒《だんらん》となった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

宵闇の祭り

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

佐飛丸の忠告が耳に残っていた舞は、学校でつとめて普通にふるまうようにした。
妙に友達に合わせようとする不自然さの無くなった舞は、同級生とも気楽に話せるようになった。言葉を交わせる友達が増え、ひと月もする間には、気のおけぬ友達もでき、舞の心の枷《かせ》は少しだけ軽くなっていた。

木々の葉が大きく、山の緑がより濃く力強くなり、広い鏡田には早苗が植わり春の残滓《ざんし》さえすっかり消えてなくなった梅雨入り前の夕暮れ。
舞はひとり自転車に乗り、母の頼まれものを祖父の家に届け、帰り道を走っていた。住宅地にある祖父の家の近くから、舞の家が近くなると次第に家はまばらになり、田畑が多くなる。薄暗くなり自転車のライトをつけると、ペダルが少し重くなった。
野をゆっくりと走る風は生命力に溢れているが生暖かく、暗さの増す周囲とともに舞を心細くさせる後押しをした。
ふと、強い風が舞の後ろから横を通り過ぎた。背中で結んだ長い髪の先が右の肩越しに前に出る。
バランスを崩し、自転車をとめた舞の目に明かりが見えた。
西郷神社に明かりがともっている。
こぢんまりとしているが、提灯《ちょうちん》の下に出店が並んでいる。
この地域の祭りだろうか。
それまで気が付かなかったのか、がやがやとした祭りに集う人々の声が聞こえてきた。
「お祭りがあるっていうの、知らなかったなあ」
宵闇《よいやみ》の中、オレンジ色の提灯がぼうっと境内を浮かび上がらせている。
舞はにぎわう人々の中に、見覚えのある人影をみつけた。
ぼさぼさの髪にひょろっとしてやや猫背の背格好。
舞は自転車を境内の入り口に立てると、人ごみをより分け駆け寄り見覚えのある背中をたたく。
振り向いた佐飛丸は焼けた小魚を咥えていた。
その魚がポンと、驚いた顔の佐飛丸の口から飛び出る。
「お、おまえ、なんでここに」
「なんでここにって、前に佐飛丸と会った西郷神社でしょ」
「そ、そりゃあまあ、そうだな」
「お祭りやってたの、知らなかった」
佐飛丸はしげしげと舞を見つめ、手に持った串に一匹残った魚を口の先で咥え抜き取ると

バリバリと噛み、ごくんと飲み込んだ。
「おれ達しか知らないお祭りだからな」
「この地域の人たちだけのお祭りなの？だからちょっと小ぢんまりしているのかぁ」
「まあ、そんなところだ」
「お魚、美味しそうだね」
「そうか？」
佐飛丸は、ふと何かを思いついたように舞の手を引くと「やきざかな」と看板を掲げている出店の前まで連れて行った。
初めて佐飛丸の大きな手に自分の手を握られ、少しうれしかった。
出店では鉢巻を巻いた白髪交じりで角刈りの大男が、炭火の上にかけた網で魚を焼いている。
「おっちゃん、モロコとアブラメ二匹ずつ焼いてくれ」
黙々《もくもく》と魚を焼く大男に、佐飛丸が声をかけた。

「えー？お代は私が払うよ」
肩にかけたカバンから財布を取り出そうとした舞であったが、それよりも早く佐飛丸がポケットから取り出したものを店主に渡した。
「おっちゃん、お代は丸石の白いの四個な」
受け取った店主は大きな手平の上で、丸く光沢のある四個の石をじゃらじゃらと転がすと柱に下げた革袋の中に入れた。
店主は焼けたアブラメとモロコが一匹ずつささっている串を二本、佐飛丸に渡しながら横目で舞を見る。
「佐飛丸、その娘《こ》――――」
店主がそう口にしたとき、佐飛丸は魚の刺さった串の一本を舞に渡した。
「食え、旨いぞ」
「ありがとう。ん、熱い。ほろ苦いけど――――美味しい」
「だろ」
佐飛丸は得意げに指で自分の鼻を撫でた。

「兄ちゃん、こいつ誰？」
少年の後ろに、いつの間にか男の子が立って、舞を見上げていた。
黒髪の短髪に、白いランニングシャツ、草色の半ズボンに草履を履いている。佐飛丸をそのまま小さくしたような男の子だ。
「ホーキ丸、この人は兄ちゃんの友達だ」
男の子の名前はホーキ丸と言うらしい。
「トモダチ？トモダチってどこのマモリなの？」

「マモリじゃねえ。友達だ」
佐飛丸は笑いながらホーキ丸に言った。
「この子、佐飛丸の弟なの？そっくりね」
「そうだ。俺の弟だ」
佐飛丸はホーキ丸の頭を撫でた。ホーキ丸は指を咥えたまま佐飛丸と舞を見上げ、きょとんとした顔になった。
「おお、佐飛丸、ホーキ丸、ここにおったか」
皺枯《しわが》れた、それでいて力のある声が三人を振り向かせた。
三人の視線の先に腰の曲がった老婆が立っている。
「ナカの婆様、来てたのか」
佐飛丸が困ったような顔をした。
「年に一度の祭りじゃ。来ないわけなかろう。んー？」
腰の曲がった総白髪の老婆の、皺に埋まった細い目が一瞬丸く開かれ、素早い足取りで舞に歩み寄った。
訝《いぶか》し気なそれでいて鋭い光が瞳に宿っていた。
「おぬし、何処から来た？」
「薄葉から来ました。あ！こんばんは。私、舞と言います。」
舞はぺこりと頭を下げた。
「ほうほうほう、薄葉のう。このすぐ傍じゃな」
老婆は舐めまわすように舞を見て、クンクンと鼻を鳴らし匂いを嗅いでまわる。
舞は肩を竦《すく》めた。
「この匂い、間違いないのう。こりゃ正真正銘の生娘《きむすめ》じゃ。そのうえここに居るということは――」
老婆は自らの言葉を区切り、自ら頷《うなづ》いた。
「婆様――」
咎《とが》めるように佐飛丸が老婆に言った。
が、ナカの婆様は構うことなく言葉を続ける。
「この娘、見所があるのう。――になるのは勿体無いほどじゃ」
左飛丸が呆れ顔で首を横に振ったが、
「キムスメってお酒の名前かな？」
と、きょとんとした顔で言う舞の言葉に噴き出した。
少し笑ったあと、佐飛丸はすっと無表情な顔になり、
「ナカの婆様の言うことは気にするな」
と低く小さな声で言った。

佐飛丸は舞の手を引き「かわびな」と「てながえび」の出店を回り、焼いて串に刺したも

のを奢ってくれた。
今まで食べたことのないものばかりだったが、芳ばしく味もよかった。
舞は私もお金を出すというのだが、
「今日は丸石のいいのを沢山持っているから」
と請け合わなかった。
祭りの途中、着物姿の小さな子供たちが数人駆け込んできて、出店と出店の間で「メダカ踊り」を披露し、人だかりから拍手を受けていた。
奇妙なメロディとリズムに合わせて、小魚の群れが向きを変えるように子供たちが踊る。
それを指さし佐飛丸が笑っている。
舞も一緒に笑った。
お腹も膨れて、歩き回った心地よい疲れに舞が石灯篭の下に座り込んだ頃、お社の前に杖をついた大柄な婆様が立った。
髪には紙の飾りが巻き付けられている。
「おお、キヌの大婆様だ」
祭りに集まった者たちのざわめきの声が聞こえた。
「皆の衆よ、萬《よろず》のマモリ達よ。祭りは楽しめたかえ？」
しわがれた老婆の声であるのに、潮が満ちてくるような力強さがあった。
わあ、と歓声があがった。
「今宵の祭りもそろそろ終いじゃ。この勢いで夏を乗り切ろうぞ」
境内は一層盛り上がった。

祭りの屋台がひとつ、またひとつと提灯の灯を落とし始めた。
「そろそろ、今年の祭りも終わりだな」
佐飛丸が腰に両手を当てゆっくりと周りを見渡しながらつぶやく。
「えー？もう終わっちゃうの？」
「夏の風が吹いたり大きな雨が降ったりすると、皆忙しくなるからな。この祭りは忙しくなる前の憩いなんだ」
少しずつ明かりが消えていく祭りの風景を見ていると、オレンジ色の提灯の光が揺らいで見えた。
舞も自分の足元が揺らいだような気がした。
びゅう、と強い風が吹く。宙に浮いたような感覚が全身を支配した。

「おい。起きろ」
肩を揺すられて舞は目をさました。
石造りのお社に背中を預けたまま、眠っていたらしい。
佐飛丸が腰を折って舞をのぞき込んでいる。

「あれ？お祭りは？」
「――――」
「あたし眠っていたの？夢を見ていたのかしら？」
「そうみたいだな」
辺りを見渡すと、夜の帳《とばり》はとうに降り、神社の境内には左飛丸と舞以外誰もいなかった。
先ほどまでの喧騒が嘘のように消えていた。
ただ虫たちと田んぼの中で鳴く蛙の声が聞こえている。
木々の葉の間から見える空には星が光って
いて、少し呆れたような顔で佐飛丸が舞を見ていた。
「あ、大変！うちに帰らなくちゃ。暗くなったしお母さんが心配してる」
起き上がった舞は、背中についた苔を後ろ手で払いながら、境内の入り口に置いた自転車まで走った。自転車に飛び乗り、４～５メートル漕ぎ出したところでＵターンし、境内の入り口で立って見送る佐飛丸の前で止まった。
「また会おうね」
「おう！気を付けて帰れよ」
佐飛丸は手を振りながら笑っていたが、舞の後姿が見えなくなると、すっとまた無表情になった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

忘れ物

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夏の盛りが過ぎ、賑やかだったクマゼミやアブラゼミの鳴き声が次第に減り、ツクツクホーシの声が野山に響くようになると、大地の全てを圧倒していた緑の勢いは陰りを見せ始める。

舞は夏休み後半の補修を受けながら、ぼんやりと校舎の窓から校庭とその後ろの野山を眺めていた。夏が始まった頃に比べると、校舎の西側に開けた、体育館の屋根越しに見える校庭に落ちる木の影が、少し北側に伸びているように思えた。

ひと夏の間に、舞には何人かの友人が出来ていた。

補修の時間が終わり、本を鞄にしまっていると、隣の席の中原由美子が話しかけてきた。

由美子は明るくよく笑う、背の高い比較的整った顔立ちの少女だったが、ヒッツメ髪と厚いレンズの眼鏡できれいな顔を隠している。少しヲタク趣味があり、漫画や本を読むのが好きな舞とはよく気が合った。家も近くにあり、今日も一緒に帰ることになった。

由美子はとにかくよくしゃべり、大きな声で笑った。今日もお気に入りの漫画を舞のために持ってきてくれていた。由美子の母は舞の母が勤める薬局のある黒磯病院で働いているとのことで、そのことも気が合う要因のひとつだった。

「舞ちゃんのお母さんは若くて奇麗だって、うちの母が言っていました。こんな趣味もきっと笑って許してくださる方なのでしょうね。うちの母なんて歳が歳だし、ヲタク趣味を全く理解しようとしないのです」なんて愚痴をこぼして一緒に笑った。

本の内容や好きなアニメのストーリーを語り合いながらの帰路はあっという間で、気が付けば家の前の路地にさしかかっていた。

由美子に手を振り、家に入ると下駄箱の上にある見慣れた小さなポーチに目が止まった。

母がいつも免許証を入れているポーチだ。

まさかと中を開けて確認すると、ピンク色の皮のホルダーに免許証が入っていた。

「おかあさん、免許証忘れて仕事に行っちゃったんだ」

舞は鞄からスマホを取り出し、母にＬＩＮＥを入れた。仕事中電話は取れないが、チラッとスマホの画面を見ることが出来るだろうと思ったのだ。

「お母さん免許証を玄関に置いたままだよ」

とメッセージを入れると、しばらくして既読になった。
それから数分後、スマホは軽やかな着信メロディを奏でた。
「あ、やっぱりそこに忘れていたのね」
「免許証、今から届けるから」
忙しいのか、舞に「ありがとう」という言葉もどこか上の空である。
「ごめんね舞。ここのところちょっと忙しくて、お母さんそそっかしいね」
舞は玄関に鍵をかけると、自転車に乗って西那須野駅に向かった。込み合った駐輪場に自転車を停めて切符を買い、在来線のホームに進む。古びたホームに停まっていた電車に飛び乗り、母の勤め先の最寄りである黒磯駅で降りた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

乗合バス

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夏の終わりの未だ強い夕暮れ時の陽の光が、舞の頬に斜めにあたっていた。

那珂川の畔《ほとり》をとぼとぼと歩くと、伸び始めたススキの穂がゆるやかな風に揺れていた。

母に免許証を届けたあと、一緒に車で帰り、あわよくば買い物でもできればなどと抱いていた淡い期待は、貴子の残業により露と消え、舞はひとり帰宅するべく、黒磯駅に着いたのだが、次の電車まであと３０分ほど時間があり、暇つぶしに散歩に出たのだ。

「おい」

聞き覚えのある声に、舞は振り返った。

ぼさぼさ髪の少年が手に猫じゃらしを持って、指でくるくる回しながら舞の後ろに立っていた。

「こんなところで何してんだオマエ？」

「お母さんが自動車の免許証忘れて来ちゃったっていうから届けに来たのよ。佐飛丸こそここで何してるの？」

「お前と似たようなもんだ。ナカの婆さまの用事で呼び出された」

「へえ、ナカの婆様？お祭りのときに見た――――ん？あれ？あれは夢じゃなかったわけ？」

「まあ、そういうことだな」

決まり文句のように佐飛丸がつぶやいた。

「私はお母さんの車に乗せてもらって帰るつもりだったけど、今日は忙しくて残業なんだって。だから電車で先に帰りなさいって言われちゃったの」

期待が外れてしょんぼりした舞の横顔を、佐飛丸は横目でチラと見た。

「そうか、ちょっと寂しいな。よし、しょうがねえから俺が一緒に送って行ってやるよ」

「ホント！？じゃあ駅までお話しながら歩こっか」

舞の表情にぱぁっと明かりが灯る。

「駅？ああ、電車ってやつには乗らないぞ。乗合バスで帰ろう」

「乗合バス？」

「お前、時計を持ってるだろう？今何時だ？」

舞は腕時計を見た。

「えっと、五時五十八分だけど」

左飛丸はにっと笑った。

「六時の乗合バスに間に合うな」

「？？何も来ないよ？」

舞は背伸びをして道から遠くを見た。
暫くして、ゴーン、と北の山の麓にある寺の鐘が鳴った。
「壱号車が行ったぞ。弐号車でタイミングを計って、参号車に乗る」
「えー、バスなんて見えないんだけど」
「あはは。おれにも見えないぞ。乗合バスは乗るか聞くもんだ」
ゴーン、と二回目の鐘が鳴る。
「弐号車が行ったな。おい、乗る準備しろよ」
「もう、わけわかんない」
「しょうがねえなあ」
佐飛丸は、舞の背後に回ると、左の脇に頭を入れた。右腕で肩を抱き、左腕で両足を持ち上げる。お姫様だっこの体勢になった。
「ちょ、ちょっと何するのよ？！」
舞の悲鳴に似た言葉を聞いて聞かずか、佐飛丸は、
「せえの」という掛け声とともに、舞を抱いたままぴょんと跳ねた。
ゴーン。
三度目の鐘が鳴った。
「よし、乗れた」
二人はたちまち空に向かい上昇した。
佐飛丸の肩越しに見える夕暮れの那須野が原の風景がびゅうびゅうと後ろに流れている。
新幹線を追い抜き、高架橋の上を佐飛丸に抱かれたまま、南に向かって飛んでいる。
右手に、女峰山に傾いた夕日が見えていた。
あまりの高さに、佐飛丸にしがみつく手に力が入った。
「ねえ！！これって、飛んでるの？」
「そうだ」
「なんで飛べるのよぉー！？」
「寺の鐘の音がしたろ。あれに乗ったんだ」
「ひょっとして、乗合バスって、お寺の鐘の音なの？」
「そうだ」
「信じられない!!」
「六時の鐘だから、バスが陸《ろく》号車まで出るから乗りやすい。一時とか二時はタイミングが取りにくくてなかなか乗れない」
「いやいやいや、乗りやすいとか乗りにくいとかいうレベルじゃなくて――」と舞が突っ込み入れる時間もなく、
「そろそろバスが消えるぞ。箒川に降りるからな」
隕石の様に落下する二人。
「きゃあ！落ちる！！」

魂が消えてなくなるような落下する感覚に舞は必死で耐えた。
しかし着地点に近づくほど速度はゆっくりになり、佐飛丸は舞を抱いたまま、ふわりと箒川の堤防に降りた。
「着いたぞ」
力の限り佐飛丸に抱き付いていた舞はふと素に戻った。
そっと目を開けるとぼさぼさ髪の下の大きな切れ長の瞳がじっと舞を見つめていた。
みるみる顔が赤くなる。
「ちょ、ちょっと降ろしてよ」
急に腕の中で暴れだした舞を、佐飛丸は草の生えた堤防の上に放り投げるように降ろした。
どすんと腰から落ちる。
「痛あーい！――――なんで急に降ろすのよ」
「お前が降ろしてくれって言っただろうが」
「もう、佐飛丸のバカ。知らない」
「ここからだと、お前の家に近いだろう。じゃあな。おれは帰る」
後ろ姿のまま、蛇尾丸は手を振った。
「ちょっと佐飛丸――」
左飛丸が振り向いた。
「なんだ」
「佐飛丸って、どうしてこんなことが――――」
びゅうと、夕暮れには思いがけず強い風が吹いた。
舞は思わず目を瞑り、再び開けたときには佐飛丸の姿はそこにはなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

告白

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ねえ、由美子ちゃん、超常現象って信じる？ちょっと話聞いてもらえるかな」
翌日、補修が終わった後、舞は神妙な顔で由美子に話しかけた。
由美子はカバンに教科書とノートを仕舞う手を止めて振り向いた。
「超常現象とな？これはまた私たち年頃の女子にしてはコアな話題をふってきましたね」
中原由美子が舞の問いに食いつき、眼鏡の縁を指で上げながらヲタク口調で答える。
「ねえ、笑わないでね。私、昨日凄い体験しちゃったの」
「すす、凄い体験とは？」
「不思議な妖精みたいな男の人と会った」
「おっふ！コアな話題かと思えばこれはまたディープな発言！舞ちゃんって私と同じ匂いがするとは思っていたけれど、これはこれは予想の斜め上を行きますね」
由美子は身を乗り出した。
「で、どんな妖精を見たのですか？背中に羽は生えてました？名前はキングとかハーレクインとか言ってませんでした？口を開けると亜空間に通じるブラックハウンドを連れてたりしませんでした？」
矢継ぎ早にまくし立てる由美子にちょっとたじろいだ舞であったが、ゆっくり語り始めた。
「私たちと同じかちょっと年上くらいの男の人で、半ズボン履いて汚れたシャツを着てて、髪はボサボサで。名前は左飛丸っていうの。ねえ、こんなこと言ったらまた更にオカシイ人だと思われそうなんだけど、その妖精が私をお姫様抱っこして、お寺の鐘の乗合バスで私を黒磯から薄葉まで送ってくれたの」
「な、なんと名前が左飛丸とは！そして舞ちゃんと一緒にお寺の鐘に乗って？名前からしてそれは妖精ならぬ妖怪と思われますね。ところでその妖怪さんはイケメンなのかしら？」
「妖怪？まあ、言われてみれば――見た目は髪の毛ボサボサだけど、ちょっとしたイケメンよ」
「おっふ！イケメンにお姫様だっことは――ショタコンの妄想入ったかと思いましたが、対象年齢的に外れていますわね」
「ショタコン？」
「ゴホンゴホン。すみませんすみません。舞ちゃんみたいな清い女子が気軽にショタとか口にしてはいけないわ。そういうのは私のような腐《ふ》の付く女子の話題なの」
「フ？」
「あ、今の言葉は気にしなくってオッケーよ。似たような妖怪がいないかうちに帰ったら秘蔵の妖怪図鑑とネットで調べてみるわね」
「ねえ、由美子ちゃん。私、とっても変な事言ってるでしょう？オカシナやつだと思う？」

「いえいえ、これまで以上に舞ちゃんとは仲良くできそうな気がしてきましたわ。同じ匂いがするどころか、同じ穴のムジナ的な親しみを覚えます」
中原由美子の舞を見る瞳は、星の様にキラキラ輝いていた。
例の如く由美子と楽しく語らいながらの帰り道となった。

||||||

「明後日、楽しみだわ。あのお店で一番高いお料理注文しちゃおうかな？」
「ちょっとそういうのはやめて」
貴子は笑っていた。

レストラン百葉の店内は程よく焼けた肉とソースとコーヒーの香りが柔らかな空気にまざり漂っていた。
山小屋をモチーフにした木枠のガラス窓の外に、田んぼの中に建つ家並みの灯りが見えていた。
舞と貴子が横に並び、向かいの席に小原が座っている。
肉が好きだがナイフとフォークの使い方がいまひとつ得意でない舞は、切らなくていいサイコロステーキを注文した。
小さなステーキをひとつひとつフォークで刺して口に運ぶ。
店に一緒に入って、メニューを注文して、それなりの言葉は交わしたものの、誰も具体的な内容には何一つ触れないまま食事は進んでいった。
なんとなく気まずい空気が流れる中、舞はフォークを皿に置いた。
紙ナプキンで口の端をちょんと拭く。そして小原のほうを見て背筋を伸ばしたあと頭を下げた。
「小原さん、先日は失礼な態度をとってすみませんでした」
小原は慌てて背筋を伸ばした。
「え、いや、その、あの状態では仕方ないと思う。それより僕も舞さんの気持ちも考えずに急ぎ過ぎて」
「あの。ひとつ訊いていいですか？」
「な、何かな？」
「小原さん、結構お若いですよね？母とどれくらい違います？」
「ええと、貴子さんより5歳ほど下です」
「5歳？」
「えらく下でしょう？」
小原は神妙な顔になった。貴子より歳下だということを少なからず気にしているらしい。
「いえ、失礼ですがもっと下だと思っていました。母より5歳下ってことは、３１歳ですよね。二十台後半だと思っていました」
「すみません、なんていうか頼りないもので若く見られるんです。お母さんより歳が若いから心配でしたか？」
「歳が若いから心配なのではなくて、小原さんのご両親が小原さんより年上で、しかも私というコブ付きの女性との交際を反対されるのではないかと思って」
「ちょっと舞、コブ付ってなんて言葉使うの！」
貴子が慌てて舞に言った。

「いいじゃない。コブは自分の事なんだから。だって私がＯＫ出しても、ご両親がお母さんのこと気に入らないと何にもならないじゃない？私は小原さんとおかあさんお似合いだと思うけど」
「え？」
小原の低い声が裏返って高くなった。
「小原さんさえよければ、また三人でお食事したいです。またステーキ奢ってくださいね」
にっこりと笑う舞の横顔を貴子が見る。
「舞、あなた――――」
「私、お母さんと小原さんが一緒にいてもいいなと思う」
小原が驚きと喜びが入り混じった表情になった。幼児の描いた似顔絵のように、目も口も大きく丸く見開かれている。
ほんの数秒の沈黙ののち、貴子が小さく咳ばらいをした。
「娘のＯＫは出たみたいね」
舞が口に手をあてて笑った。
「ありがとう、舞さん。ありがとう」
小原はうれしさに顔をくしゃくしゃにして、舞に礼を言った。
「いや、まだ問題解決してないですよ」
「僕の親の事ですか？実は僕の両親はもうこの世にいないんです。僕が高校の頃交通事故で死んでしまって。両親の代わりに僕を育ててくれて、僕が薬剤師になるために大学を出してくれたのは叔母夫婦です。その叔母は黒磯病院の看護師長やってまして、ええと、既に貴子さんの事良く知っていて、あのヒトなら間違いないからって後押ししてくれてます。今日はお食事に誘うって報告したんですが、そう言ったら、娘さんに気に入られるように頑張れ、まあ当たって砕けて来なさいって言われました」
「あ――すみません、ご両親亡くなっていたって知らなくて」
「いいんですいいんです。舞さんにＯＫもらえたからいいんです」
その目じりに、涙がたまっていたことを舞は見逃さなかった。
（やっぱりいいひとだ。よかった）
舞の目じりにも、薄く涙が浮かんでいた。

||||||

びゅう、と風が吹き佐飛丸の姿は消えた。
「ちょっと、佐飛丸？」
杉の葉が風に泳ぐザザザという音のみが残り、佐飛丸の姿はどこにもなかった。

舞は西郷神社の近くにある書店に寄り、古典ＳＦの単行本を探そうと店内を歩いていると、ヲタク情報誌のコーナーで中原由美子を見かけた。
いつものように明るい由美子と本のことについて話したあと、つい先ほど西郷神社で妖怪と会ったのだというと、由美子が心配そうな顔で話し始めた。
「あの、舞ちゃん。たぶん私の気のせいだと思うですが――」
中原由美子の話の内容によると、いろいろ調べた結果、普段見えないはずの妖怪が急に見えだしたりするのは、魂が不安定だからだというのだ。うっかりすると向こう側の世界に連れていかれるかもしれないので、気を付けて欲しいと。
そして、手相を見せてというので左手を出すと、じっとその掌を見つめて、
「水難の相が出ているわ。舞ちゃんほんとに気を付けてね。暫くは川とか海に近づかないで」
と今にも泣きそうな顔で言うと、両手を伸ばしハグをしてきた。
大柄な由美子にハグされて、どうしていいかわからない舞は、ふうとため息をついて店内を見渡すと、ウインドウガラスに映った自分たちの姿を見つけた。
そして由美子の背中をぽんぽんと叩いた。

四日後、佐飛丸の予言通り台風が関東地方に接近した。
気象庁の予報では、観測史上最大といわれる規模と勢力を保ったまま上陸する可能性が高くなったとのことだ。しかも伊豆半島を掠め神奈川南部に上陸し、茨城県を通過し東北に抜けるという最悪のコースをとることは確実である。
那須野が原も、朝方降り始めた雨は次第に勢いを増し、夕方には既に観測史上最高の雨量を記録していた。
台風は次第に接近し、ごうごうと那須野が原にささやかに生きるすべての命を蹂躙すべく風が吹きすさぶ。

西郷神社の石で作られたお社の周りに、四人が座禅を組んでいる。
佐飛丸、ホーキ丸、ナカの婆様、キヌの大婆様だ。
お社の中には青白い炎がともっていた。信じられないほどの大雨が降っているのに、雨ざらしのお社に灯った炎は消えない。
四人の周りを、大人の手のひらほどの大きさの牛や馬の頭をした小人が、輪をなして取り囲んでいた。小さな松明をもって奇妙な舞を踊り、口々に妙な呪文を唱えながら四人の周囲をぐるぐると回っている。

お社を囲む四人、佐飛丸、ホーキ丸、ナカの婆様、キヌの大婆様はそれぞれ苦悶の表情を浮かべていた。
突然、ホーキ丸の体がボコボコと膨らみ始めた。
口、鼻、目、耳から、どっと水が流れ出してくる。
「いかん、ホーキ丸が荒神になってしまう」
ホーキ丸の異状を止めようとして差し出したナカの婆様の枯れ枝のような腕にいくつもの瘤ができ、膨れ上がった。
「ぐ、」とナカの婆様が呻く。
「ナカ、動くでない。下手をするとお前も荒神になってしまうぞ」
座したまま、キヌの大婆様が一喝した。
「ホーキ丸はホーキ丸自身で耐えるしか仕方がない。我らが正気を保つことが先じゃ」
突然、佐飛丸が座禅をといて立ち上がった。
「ホーキ丸の近くにはアイツがいる」
「佐飛丸、それは最初から解かっていたことぞ。あの娘がこの秋のうちに贄となろうことは、わかっていたことぞ」
キヌの大婆様がまた怒鳴る。
「おれは、あいつを———」
佐飛丸は、キヌの大婆様に一瞥すると、ホーキ丸の口から出てくる水の中に飛び込んだ。

暗くなってからの避難は危険だ。
洪水となれば尚更である。
外が明るいとしても、洪水によって辺り一面が水に覆われると、何処までが道路で、どこからが水路で、どこからが農地や宅地であるかということが分かりにくくなる。
道路の横には水路がある。溢れかえる水で、水路の蓋が流されて、口を開けている場合が多い。
道路の脇に寄ったつもりが水路に落ち、そのまま流されてしまうことも考えられる。
外が暗くなってからは、二階がある家ならば垂直避難、即ち二階に避難したほうが良い。
しかし、いかにしっかり者の舞といえど、まだ中学生である。
夕方から繰り返される大雨のニュースと、屋根をたたく豪雨の音に不安を募らせた。
タイミング悪く、貴子から、職場から帰れなくなったという電話が来た。
その家は箒川に近いから、少し高台にある祖父の家に避難して、という。
小さなバッグに大切なものをいくつか入れ、肩から斜めにかける。
その上からレインコートを着て、雨靴を履き懐中電灯を右手に玄関を開けると、スマホがけたたましく音をたてた。舞はいったんレインコートのボタンをはずし、バックからスマホを取り出した。音はこの地域に出た避難指示を知らせる警報だった。

この段階で、道路に十センチほど水が溜まっていた。
舞は息苦しいほどの雨の中、祖父の家に向かった。
道が川になっていた。
大きな雨粒が、道路に上にたまっている水面に落ち、飛沫《しぶき》をあげている。
その飛沫《しぶき》が霞のように舞の視界を遮っていた。
雷鳴が轟くたびに身を竦《すく》めながら歩く。
祖父の家に向かえば、水深は浅くなるはずだと思っていたが、逆に深くなっていった。
どのくらい歩いただろうか、いつの間にか、膝丈までの深さになった。
舞は祖父の家に行くことを諦め、自宅に戻ることにした。
向きを変えると水の流れが舞の足を止める。
何かが足に当たった。流れてきた木材だろう。舞は痛みとともにそれに足をすくわれた。
水の中に倒れ腰まで水に浸かると、ゆっくりだが大きな水の流れに押され、自分が流されていることに気が付いた。何メートルか流されて、ようやく電柱につかまって止まった。
母に助けを乞おうと、バッグの中のスマホを取り出そうとしたが、濡れた手で滑り濁った水の中に落ちる。
絶望が暗い空とともに舞の上にのしかかった。
水の流れは深く早くなり、電柱をつかむ手も痺《しび》れてきた。
私はここで死ぬんだ――
いやだ。こんなところで死にたくない――
お母さん、助けて――
私が死んだら、お母さんが悲しむだろう――
お母さんと小原さん仲良く暮らしてね――

水に体温を奪われ、思考する力をも奪われ、舞の意思は散文的に複数の異なる方向へ伸び、そして潰えようとしていた。
電柱を掴む手から力が抜け、水の中へ沈んだ。
潰《つい》えようとしている意識の中、佐飛丸の顔が浮かんだ。

||||||

祭りの終わりに挨拶をしたキヌの大婆様？
ふと記憶がよみがえった。
その婆様が座禅を解いて立ち上がった。
杖で舞を指し示した。
「娘《むすめ》よ」
自分の事を言われていることに気が付いた舞は
「はい」
と答えた。
「お主は、本来ならば今宵の雨で流され、死んで我らの贄《にえ》となる運命だったのだ」
「私が死ぬ？」
「しかし、この莫迦者《ばかもの》が贄《にえ》であるお前を助けてしまった」
莫迦者《ばかもの》と杖でさされているのは、座禅を組んでいる佐飛丸である。
「佐飛丸！」
舞は叫んだが、声が声にならない。自分の身体がどこか別のところにある感覚だ。
「こやつはここ一年の因と果をひっくり返してしまいおった。自分の因とお前の因を取り換えたのだ」
「キヌの大婆様、もういいだろう。おれはこいつに借りがあったんだ」
佐飛丸は座禅をといて立ち上がり、舞のほうへ向き直った。
「おまえは覚えていないだろうが、昔おれの命を助けてくれたことがあったんだ」
「え？」
「おれは――――お前をただ助けたんじゃねえ。助けられたから助け返した。だからこれで貸し借り無しだ――――。お前がまだ小さい頃だ。おれが山椒魚の姿で蛇尾川へ戻ろうとしていたとき、人間の子供達に捕まって、もう少しで殺されるところだった。そこへお前がやってきて、人間たちからおれを守ってくれた。お前の小さい手で、おれを水に戻してくれた。覚えているか」
万華鏡の光の破片が一つに集まるように、夢で見た記憶の断片がつながった。
「おじいちゃんちに遊びに来た時だ」
舞がまだ幼いころ、母方の祖父の家に皆で遊びに来たことがあった。
その頃は父も健在で、舞を車に乗せていろんなところへ連れて行ってくれた。
その日、舞は父に連れられて近くのスーパーに買い物に出かけ、その途中に蛇尾川の河原で遊ぼうと車を降りたところで、何かを捕まえて騒いでいる少年たちを見つけたのだ。
舞はトカゲのような形をした山椒魚が怖かったが、小さな命を弄《もてあそ》ぶ少年たちのことが許せず止めに入った。すぐそばで父親が見ていたこともあり、舞は少年たちから助け出すことに成功し、大きな石の隙間へとそれを逃がしたのだ。
「あのとき、石の間から逃げるおれのことをずっと見ていてくれただろう。あの目をおれは忘れなかった。だからお前が帽子を取りに蛇尾川に来た時、すぐにお前だとわかったん

だ」
「おれの名前は蛇尾丸《さびまる》。読みは同じサビマルだが、佐飛じゃなくて、蛇の尾って書く。石の下を流れる水の中に住む蛇尾川の主さ。キヌの大婆様の言うとおりお前はこの洪水で命を落とし、俺たちはその生き胆を食らうことで力をつけ洪水を治める。そういう筋書きだった」
「私、死ぬ運命だったの？由美ちゃんの言うとおりだったんだ。だから佐飛丸といっしょに不思議な世界が見えたんだね」
「そうかもしれねえ。世の生き物は死ぬ運命に入ると、この世と死の世界との狭間である、俺たちの世界が見えるようになるんだろうな。お前はこの洪水で死んで、おまえの弟として生まれ変わるはずだったんだからさ」
「え？」
「要らん事を言った」
佐飛丸、いや蛇尾丸は苦笑いをした。
キヌの大婆様が蛇尾丸の後ろから叱咤する。
「この莫迦者《ばかもの》が。こともあろうか贄《にえ》の娘の命を救いおって。お前は掟のとおり命を失い、しかも生まれ変わってもマモリではいられなくなるのだぞ」
「承知の上さ。さあ、大婆様やってくれ」
「やっと一端のマモリになったと思うておったのに」
キヌの大婆様は杖の先の瘤を蛇尾丸の胸に押し付けた。
「じゃあな、舞」
蛇尾丸は初めて舞を名前で呼んだ。そして片手をあげて笑った。
「俺は、蛇尾川の主の蛇尾丸だが、お前がつけてくれた佐飛丸という名が気に入ってたよ。ありがとうな、いい名をつけてくれて」
「佐飛丸！！」
舞が叫ぶ。
大婆様は蛇尾丸の胸に杖を突き刺し、光る珠を抜き出した。
「さあ、蛇尾川のマモリの生き胆だ。この那須野が原の川の神、山の神、萬の神々よ。食らうがよい」
キヌの大婆様が杖を高くかざすと、杖の先の光の珠は四散し、雨の降りしきる那須野が原の様々な場所へ飛んだ。
すると———
暫くして雨の音が少しずつ小さくなっていく。
吹きすさんでいた風が収まり始めた。
はっとなった舞が、蛇尾丸を振り返る。
蛇尾丸の姿が少しずつ淡くなり、そして消えた。
蛇尾丸が立っていた場所に小さな光が一つ残り、蛍のようにふわりと飛んだ。

||||||

と自分がどうやって自宅まで帰ったか、まるで覚えていないのだ。
思い出そうとしても、思い出せない。思い出せないというよりは、記憶のある部分・領域がすっぽり抜け落ちている感覚だった。

秋の高い空の下、蛇尾川の洗い越しを一台の大きな車が走っていた。
小原が運転し、助手席には貴子、後ろの席に舞が乗っている。
荷台にはたくさんの家財道具と段ボール箱が積まれていた。
舞は、那須野が原に引っ越してきて早々、道を間違ってここを通ったっけ、とちょうど一年前の事を思い出していた。
「あ、小原さん、車を停めて」
運転する小原のシートを舞が後ろから叩き、小さく叫んだ。
何気なく見ていた風景の一部が、キラリと光ったように見えたのだ。
車が停まると、後のドアが開き舞が道路に降りる。
道路の脇から石の荒野を、光ったようにみえた場所へと歩く。
びゅうと強い風が吹き、舞の頬を撫でると、青く高い空へ抜けていく。
秋の乾いた風は、冬の到来を思わせる冷たさを含んでいた。
それが舞の長いまつ毛の間を通る。

ここひと月で色々な事が起こった。
台風の洪水で、麻と貴子が借りていた家は１階部分が水没し、家具や家電製品はほとんど使えなくなってしまった。
臨時的に家具付きのウイークリーマンションに仮住まいしていたのだが、小原の強い勧めもあり、彼が住んでいる那須塩原のマンションに引っ越すことになったのだ。
舞の祖父母は最初強く反対したが、小原の祖父が二人の高校時代の恩師だということがわかると手のひらを返したように賛成に回った。
一番抵抗するであろうと思われていた舞が、あっさりＯＫを出したので面食らった小原であったが、ひとつ条件をつけたいと申し出た。
実は、この条件の内容については、舞はまだ考えが及んでいないのである。
小原の提案に、もろ手を挙げて賛成というよりも、何かひとつ条件を出すというポーズをとりたかっただけなのだが。

「条件の内容は、引っ越してから言うね」
と小原と貴子には話していた。
今日はその引っ越しである。
車に引っ越しの荷物を積んで、仮住まいのマンションと引っ越し先の小原のマンションを往復していたのだ。

荷物と言っても、大きな荷物は洪水のときにたいてい水に浸かってしまい使えなくなり、浸水を免れた、二階にあった二人の衣服と思い出の品くらいなのだが。

舞を追って、貴子も洗い越しの石の上を歩いて来た。

小原はほかの車が来た時に離合できるように、道幅いっぱいに車を寄せて自らも二人のもとへ歩く。

青い空を見上げていた舞は蛇尾川の洗い越しの石の荒野に視線を落とし、寄り添って立つ貴子につぶやいた。

「私、洪水のショックで記憶障害みたいになっちゃってて、何か大切な事を忘れてしまっているようなの。でも自分が何かを忘れていることさえよくわからない」

「入院したときお世話になった先生がそうおっしゃってたわね」

「洪水の時だけじゃなくて、ここ1年くらいの記憶もなんだか曖昧なの」

心細い気持ちのためか、声が次第に細くなる舞。

貴子はそっと舞の肩を抱いた。

「大丈夫ですよ。時間が経てばきっとよくなります」

小原が優しく柔らかい声で言った。お母さんはきっとこの声が好きなんだろうなと、舞は思った。

「でもね、さっきこの蛇尾川の洗い越しを見てたら、何かが光ったようにみえて、ここに来たら思い出せそうな気がしたの。何を思い出せるかもわからないんだけど――」

そういえば、引っ越して来た時も、ここに来たっけ。風で帽子が飛ばされて、慌てて取りに行って。そこで首飾りを落として――。

「お母さん、去年那須野が原に引っ越して来た時、私ここに首飾りを落としたよね？」

「そうそう、あなた、帽子を拾ったのはいいけど、首飾りをここに落として」

「引っ越して来た日は諦めて、次の日にお母さんと取りに行ったんだっけ？」

「行かなかったわよ」

「じゃあ、どうして私は今この首飾りを持っているのかしら」

「お友達が拾ってくれたんじゃ――違うわよね？」

「由美子ちゃんとすごく仲良くなったきっかけも、それと何か関係あったような気がするの。でも、由美子ちゃんも私もなんだったか思い出せないの」

（これ、お前のだろう――）

舞はふと自ら頷いて、思い立ったように首飾りを自分の首から外すと、大きな石と石の間に出来た水たまりに落とした。

「舞、それあなたの大切な首飾りじゃないの？」

「そうだよ。だからこうしなくちゃいけないような気がしたの」

不意に、石の間から小さな光が浮き上がったように見えた。

「あ！この光だ！」

ゆっくりと宙をさまよう光を舞は指さした。
「何も見えないわよ」
「お母さん、ここに光っている小さな珠《たま》、見えないの？」
「え？どこですか？僕にも見えない」
舞には見えるが、貴子と小原には見えないようだ。
その小さな光は、風に吹かれる蛍のように、いったん宙に舞うと、小原と並んで立つ貴子のお腹の辺りにすっと吸い込まれた。

声が聞こえたような気がした。
（お前の因とこやつの因を入れ替えた――）
（お前は死んで、お前の弟として生まれ変わる筈だった――）

蛇尾川、サビ、蛇尾丸、佐飛丸――。

「お母さん、小原さん、一緒に暮らす条件、今言っていい？」
舞は胸の前で両手の拳を握り声高に叫んだ。
「どうしたの、急に？」
「今言わないと忘れてしまいそうなの」
「いいですよ、舞ちゃんのいう条件なら何でも」
小原はにっこりと笑っている。
「ええと、その。来年生まれてくる私の弟か妹に私が名前を付けたいの。その権利をください。それが条件」

「な！」
小原が大きく目を見開き、水面に上がって来た酸欠の鯉のように口をパクパクさせて、貴子を見た。
「そ、そ、そう、そう、なんですか！？」
そうなんですかの「そう」は舞の条件に対してではなく、貴子の体の変化について問うたのだ。
「え？え――――？いや、違う違う。え？違うって。あ、でも、そういえば――――」
最初、開いた掌をひらひら振って否定していた貴子だったが、思い当たる事があるらしく、次第にしどろもどろになった。
小原とふたり向かい合って手を取りながら狼狽《うろた》えている。

舞は二人を見て堪《こら》えきれず笑ってしまった。
そうだ、子供が生まれてくる。

生まれてくる子は、きっと男の子だ。
付ける名前は――――
その名は佐飛丸。
そして私が守る。舞は心に誓った。

||||||

不思議な風の舞う街。